● 第5章　こころのケア活動 ●

熊本地震からの気付きと今後に向けて

神戸赤十字病院心療内科
こころのケアコーディネーター
村上典子

熊本地震において「こころのケア・コーディネーター」として活動させていただいた経験から、
日赤こころのケア活動についての私見を僭越ながら書かせていただく。

1)「こころのケア」という言葉について

従来から、「日赤こころのケアは“こころのケアをします”と宣言するものではなく、血圧測定など自然な形から入っていく」とされており、被災者に対しては直接「こころのケア」という言葉を使わぬようにも配慮されてきたが、東日本大震災以降、保健師さんにもこの言葉への抵抗が見られるようになってきている。マスメディアは「こころのケア」という言葉を使いたがり、日赤も活動のアピールのために、そうした取材を受けることになるとは思われるが、「こころのケア」という言葉を使う際には細心の注意を払う必要があると考える。

2)DPAT(災害派遣精神医療チーム)との連携

日赤救護班とDMATの連携がもはや不可避であるのと同様、DPATと日赤こころのケアの連携も欠かせない。現地では必ずDPAT本部と連絡をとりあい、DPATが行う「精神医療」をベースとした支援(薬物療法など)と、日赤が行う「心理社会的支援」の違いを互いに認識しつつ、連携していく必要がある。

3)救護班との連携

日赤こころのケア活動の導入をスムーズにしていくためには、救護班との連携も重要である。救護班の活動していない地域で日赤こころのケアチームだけが独立して活動することは指揮命令系統上、混乱を招く可能性があるし、救護班からこころのケアのニーズを吸い上げていくことが、自然な形で日赤こころのケアを導入していくことにつながると考える。

4)リラクゼーション等の有用性

従来の日赤こころのケアでも傾聴・リラクゼーションは必要とされてきたが、今回の熊本地震ではハンドマッサージなどのリラクゼーションが有用であることが再認識された。体にふれることから始まり、自然な会話につなげていく方が「さあ、お話を聞きますよ!」という姿勢でいるよりも、被災者の心をほぐす効果があると思われる。今後、日赤こころのケア要員はこうしたことも念頭において活動することが必要であろう。

5)支援者支援

支援者(地元の病院関係者や行政職員、外部からの救援者)への支援の重要性も、従来の日赤こころのケアでも言われてきたことではあるが、特に熊本地震では役場内にリフレッシュルームを開設するなど、支援者支援に力を入れたことは功を奏したと思われる。今後も日赤こころのケア活動の大きな柱の一つとなるであろう。

6)まとめ

DPATの台頭により、「日赤こころのケアチームは不要になるのでないか」という危惧は多くの人が感じたであろうし、正直、私にもあった。しかし、「からだとこころを切り離さず一緒に診ていく」日赤災害救護のすばらしさを今回の熊本地震での活動を通して再確認できたように思う。日赤が全国に持つ「ネットワーク」も、他組織ではなかなか得がたい「強み」であると考える。

CHAPTER 6
第6章
全国赤十字病院からの支援

人的派遣

熊本赤十字病院支援実施の経緯

熊本赤十字病院では、前震直後から全職員をあげて災害対応に当たっていたが、本震の発生により引き続き不眠不休での対応を余儀なくされる事態となった。自ら被災した職員も多く、また余震も続くなかで災害対応の長期化が予想されたため、日本赤十字社本社は、全国から支援要員を募集し病院の業務支援を行った。

本震当日の16日午後には、支援調整のため本社の医療事業推進本部から職員2名が派遣された。同院及び救護・福祉部等本社関係部署と調整を行い、必要な支援要員の派遣を各都道府県支部へ依頼。募集をかけると、わずか数時間で定員を上回る応募があり、20日には医師、看護師、事務からなる40名が熊本赤十字病院に到着。その後、6月5日まで約1ヵ月半にわたり、医師、看護師、事務、薬剤師などのコ・メディカル等総勢305名の派遣が継続的に行われた。

病院支援コーディネーターによる調整

熊本赤十字病院と病院支援チームの間には、病院支援コーディネーターが配置された。病院支援コーディネーターによって、病院の状況及び活動内容が本社医療事業推進本部に随時報告され、活動中の病院支援要員及び次回以降の派遣予定者について詳細な調整が行われた。

病院支援コーディネーターとして派遣されたのは、本社医療事業推進本部から指名された看護副部長級の看護管理者で、具体的な活動内容は、支援要員の活動調整や必要職種等の調整、本社との連絡調整、派遣要員の業務調整や安全管理、環境整備等のマネジメントであった。

これにより、4月20日から6月5日まで病院支援は滞りなく手厚く行われ、病院スタッフと支援スタッフ間で発生した問題についても、コーディネーターの調整により解決が図られた。

病院支援活動の効果

病院支援要員に対しては、主に救命救急センターや各病棟での診療行為の補助や、地震によりさまざまな物品が散乱していた院内各所の整理などを依頼した。病院支援要員が勤務シフトに加わったことで、病院職員は交替で休めるようになり、状況は大幅に改善された。

先が見えない震災対応で極限状態にあった病院職員にとって、全国からの支援要員は大きな救いとなった。疲弊した心身を休め、被災した自宅の片づけなどの時間を取ることができたことで、その後の業務も何とか乗り切ることができた。これは、全国の支部から速やかに支援要員が集結するという日本赤十字社ならではの強みであり、現場にとっては、支えてくれる仲間がいるという心強さを深く実感させるものであった。

勤務の合間に仮眠をとる職員

帰還式で病院支援要員にお礼を述べる一二三院長（熊本赤十字病院では毎日のように出迎え式と帰還式が行われた）

病院支援要員に活動の説明を行う病院支援コーディネーター
（名古屋第二赤十字病院 伊藤看護副部長）

患者の処置を行う支援看護師

■全国赤十字医療機関からの病院支援（実働期間別）

（第1次～第7次派遣、実働期間/4月21日～6月5日）　（単位:名）

	実働期間	医師	看護師	事務	合計	病院支援コーディネーター	本部支援要員
第1次	4月21日 ～ 4月25日	15	25		40	1	3
第2次	4月26日 ～ 4月30日	8	30	4	42		2
第3次A	4月30日 ～ 5月　4日	10	29	4	43		3
第3次B	5月　1日 ～ 5月　5日	4	1	1	6		
第4次A	5月　4日 ～ 5月　8日	9	27	4	40	1	2
第4次B	5月　6日 ～ 5月10日	2	3	1	6		
第5次A	5月　8日 ～ 5月12日	8	26	6	40		2
第5次B	5月11日 ～ 5月15日	6	4		10		1
第6次	5月12日 ～ 5月24日		27		27	1	2
第7次	5月24日 ～ 6月　5日		30		30	1	1
合計		62	202	20	284	4	16

■全国赤十字医療機関からの病院支援（施設別）（第1次～第7次派遣、実働期間/4月21日～6月5日　派遣日数については延べ合計人数）（単位:名）

派遣元施設名	医師		看護師		事務		病院支援コーディネーター		本部支援要員		合計	
	実人数	派遣日数	実人数	派遣日数	実人数	派遣日数	実人数	派遣日数	実人数	派遣日数	実人数	派遣日数
日本赤十字社（医療事業推進本部）									16	66	16	66
日本赤十字社医療センター	2	13	6	51							8	64
諏訪赤十字病院	1	6	4	25							5	31
旭川赤十字病院	4	25	2	14							6	39
伊達赤十字病院			2	21							2	21
釧路赤十字病院	1	7	1	7							2	14
北見赤十字病院			3	26			1	14			4	40
浦河赤十字病院			1	14							1	14
清水赤十字病院			7	58							7	58
八戸赤十字病院	2	12	1	6							3	18
盛岡赤十字病院	1	6	1	7							2	13
仙台赤十字病院	1	6	3	34							4	40
石巻赤十字病院	5	31			1	6					6	37
秋田赤十字病院	2	13	2	12							4	25
福島赤十字病院	1	6	2	12	2	12					5	30
水戸赤十字病院	1	7	2	12							3	19
古河赤十字病院			4	54							4	54
芳賀赤十字病院			2	12							2	12
足利赤十字病院	2	12	1	6							3	18
前橋赤十字病院	2	12	2	12							4	24
さいたま赤十字病院	1	6	4	25	1	7	1	13			7	51
小川赤十字病院			1	13							1	13
深谷赤十字病院	3	19	4	32	2	12					9	63
成田赤十字病院	1	6	3	27	1	6					5	39
武蔵野赤十字病院	2	12	3	18	2	13					7	43
大森赤十字病院			3	25							3	25
秦野赤十字病院			4	24							4	24
相模原赤十字病院			4	32							4	32
長岡赤十字病院			2	27	1	7					3	34
富山赤十字病院			4	32							4	32
福井赤十字病院			2	20							2	20
長野赤十字病院	1	7	2	19							3	26
安曇野赤十字病院	2	12	1	14							3	26
下伊那赤十字病院			1	14							1	14
飯山赤十字病院			1	6							1	6
高山赤十字病院	1	6	1	13							2	19
岐阜赤十字病院			5	45	1	6					6	51
静岡赤十字病院			3	25							3	25
浜松赤十字病院					1	7					1	7
引佐赤十字病院			1	6							1	6
名古屋第一赤十字病院	5	31	4	25	1	6					10	62
名古屋第二赤十字病院	5	31	6	52			1	20			12	103
伊勢赤十字病院	3	19	4	33	1	6					8	58
大津赤十字病院			1	6							1	6
長浜赤十字病院			3	19							3	19
京都第二赤十字病院	2	13	1	14							3	27
大阪赤十字病院			1	6							1	6
姫路赤十字病院			23	213							23	213
神戸赤十字病院			5	56							5	56
和歌山医療センター	5	31	14	118	4	25					23	174
松江赤十字病院	1	6	2	21							3	27
岡山赤十字病院			1	6							1	6
広島赤十字･原爆病院			2	21							2	21
山口赤十字病院			1	14							1	14
徳島赤十字病院			6	45							6	45
高松赤十字病院	2	13	4	25							6	38
松山赤十字病院			5	30			1	16			6	46
高知赤十字病院	1	6	1	7							2	13
福岡赤十字病院	2	12	6	38	1	6					9	56
今津赤十字病院			6	45							6	45
嘉麻赤十字病院			2	20							2	20
唐津赤十字病院	1	6	3	26	1	6					5	38
長崎原爆諫早病院			1	6							1	6
大分赤十字病院			3	26							3	26
沖縄赤十字病院			2	12							2	12
合計	63	392	202	1,684	20	125	4	63	16	66	305	2,330

※医師1名は支部の支援にあたった

■赤十字救護班による病院業務支援（期間／4月18日～4月27日）

（単位:名）

	救護班所属施設名	医師	看護師	コ・メディカル	事務	合計
4月18日	高知赤十字病院	2	6	2	5	15
	庄原赤十字病院	2	3	1	2	8
	京都第一赤十字病院	1	3		4	8
4月19日	沖縄赤十字病院	1	3	1	1	6
	大津赤十字病院	1	3	1	3	8
4月20日	石巻赤十字病院	3	3	1	3	10
	盛岡赤十字病院	1	2	1	3	7
4月21日	浜松赤十字病院	1	3	1	2	7
4月22日	松山赤十字病院	1	3		4	8
4月23日	鹿児島赤十字病院	1	4		2	7
	高知赤十字病院	1	3	1	2	7
	松山赤十字病院	1	3		4	8
4月24日	鹿児島赤十字病院	1	4		2	7
	小野田赤十字病院	1	3		3	7
4月25日	宮崎大学病院（日本赤十字社宮崎県支部より派遣）	2	3		2	7
	三原赤十字病院	1	3	2	4	10
4月26日	徳島赤十字病院	5	5	2	4	16
	長崎原爆病院	1	3		3	7
4月27日	鳥取赤十字病院	1	3	1	4	9
	松江赤十字病院	1	3	1	2	7
合計		29	66	15	59	169

■各医療機関からの支援医師（期間／4月17日～5月14日）（単位:名）

医療機関名	支援医師数
天草地域医療センター	2
沖縄県立南部医療センター･こども医療センター	1
北九州市立八幡病院	10
熊本市民病院	4
熊本大学医学部附属病院	1
国立病院機構　九州医療センター	1
国立病院機構　福岡東医療センター	2
国立病院機構　福岡病院	1
小波瀬病院	1
産業医科大学病院	5
すなつ松井クリニック	1
東京女子医科大学	1
東京都立小児総合医療センター	1
日本赤十字社　福岡赤十字病院	1
福岡歯科大学	2
福岡市立こども病院	14